

第二言語習得理論に関する一考察

ーインターランゲージ (Interlanguage) についてー

柳京子*

目次

- 一 はじめに
 - 二 インターランゲージ(Interlanguage)の設定の理由
 - 三 インターランゲージ研究の発展
 - 四 インターランゲージ研究の教育的意義
 - 五 おわりに
-

一. はじめに

日本語学習者を対象にした第二言語習得研究は、1990年代に入り新たな展開を見せ、音声に関する習得研究もこの15年間に急速に研究が進められた。これは、何よりもコミュニケーション能力の重要性に対する認識が研究者の間にも学習者の間にも高まってきたという背景がある。

最近の第二言語習得研究動向では、第二言語体系とも違うインターランゲージ (Interlanguage:中間言語) ¹⁾体系の存在を確認し、その特質を明らかにしようとする研究がなされつつある。これらの一連の研究から第一言語の干渉とは、異なったインターラン

* 祥明大学校 教授 日本語学

- 1) インターランゲージ (Interlanguage : 中間言語) : 外国語 (Foreign language) あるいは第二言語 (Second language) を習得する際に、途中にいくつかの言語の中間的な段階が存在するという見方における、過渡的な言語体系をさす。これは母語 (Native language) または、第一言語 (First language) の干渉 (Interference) によるものだけでなく、外国語や第二言語習得の際には共通して現れる特徴で、誤りの分析から発見されたものである。この用語は日本と韓国では中間言語という訳語が使われているが、この訳語が適切でないと思うので、本論文では原語のかたかな表記で使うようにする。

ゲージが、音声レベルでも存在することが証明されることとなった。このような言語学研究の流れの中で、従来の日本語教育においては、第二言語習得理論の研究があまり重要視されてこなかったのが現実であろう。とくに、韓国における日本語教育ではほとんどなされていないのが現在の状況である。

しかし、最近では日本語教育の中での第二言語習得理論の研究がすこしずつなされつつあるものの、いままでの日本語教育での第二言語習得研究は、おもに実践的な研究が主流をなしており、理論的な研究があまりなされていないのが実情である。

したがって、本研究では第二言語習得理論の中でとくに最近、注目を浴びているインターランゲージの理論的な研究について考察する。それは、第二言語習得過程に見られるインターランゲージの位置づけに関する先行研究について概観し、インターランゲージ研究の教育的意義について述べる。本研究の最終的目標は韓国人における日本語習得のメカニズムの解明に向けて一つの手がかりを提案しようとするのである。

二. インターランゲージ (Interlanguage) の設定の理由

1970年代の第二言語習得研究は、さまざまな概念や仮説を産み出したがその中でもっとも重要なものは、インターランゲージの概念である。その誕生以来、この概念は第二言語習得研究とその理論における主要なアプローチの背景的基盤となっている。この用語は Selinker(1972)²⁾ がはじめて使ったもので、今日、この分野における中心的概念として多岐にわたって使われている。Selinker(1972)³⁾は、インターランゲージの概念をつぎのように述べている。

「学習者が目標言語を生成しようと試みることから生じる、観察可能な出力に基づく第一言語と別の言語体系である」

このようにインターランゲージは、第二言語を学習する過程に生じる固有の概念である。この考え方の背景には、第二言語習得観の根本的な変化がある。従来の見方によると、第二言語学習者が持つその言語についての知識は、その言語を母語とする人が所持している知識と比べると不完全で間違っただのものであると考えられていた。また、その理由を学習不足に求めていたので、このような不完全な知識はできる限り早く排除して、正しい知識で置

2) Selinker, L. (1972) " Interlanguage " IRAL (International Review of Applied Linguistics) 10, pp.209-231.(in Richards 1974).

3) Selinker, L. (1974) 注2)と同様。p.117.

き換えるべきであると考えられていた。

しかし、Corder(1967)⁴⁾は第一言語習得研究に触発されて、第二言語学習者の誤りにまったく新しい分析視点を提供し、学習者は内的に備わっているメカニズムに基づいた仮説の構築と検証の過程によって、自ら第二言語の知識を構築するという学習観を提示した。これに従うと、第二言語学習者が所持する言語の知識は、たとえ不完全であったとしても「それ自身の固有の特徴と規則をもった個別の言語の型ないしは体系である。」と見ることができ。インターランゲージの考え方は、このような基本的な第二言語習得観の変化を背景にして生まれた。

Corder(1981)⁵⁾はコンピタンス⁶⁾あやまりを体系的 (systematic), パフォーマンスあやまり (Performance-errors)を非体系的であると述べ、学習者の誤りは、学習者が、学習段階において第二言語に対してもっている過渡的能力 (transitional competence)を明らかにする資料であるとして、誤りの重要性を強調している。また、Corderは言いあやまりという概念を全面に出すことによって学習者の言語研究の新たな理論化を試みている。ここで、Corderはこの不安定で過渡的な性格をもつ言語にSelinkerのインターランゲージという述語を与え、それを第一言語から第二言語にいたる中間の個所に生起する、両者に交差した部分を残す独自の言語体系として位置づけている。

Selinker(1972)⁷⁾によるインターランゲージの捉え方は、一つの重大な認識を出発点としている。一般的に成人が第二言語習得を行う場合、大部分の者がその言語を母語とする人々と同等のレベルまでに到達することはない。例外的にそのレベルを達成できる成人もいるが、その割合はSelinkerによると全体の約5%でしかない。彼はこの違いを第二言語習得において稼働される内的処理メカニズムの違いとして説明している。例外的に第二言語習得において成功する成人が利用するメカニズムは潜在的言語構造 (latent language structure)⁸⁾であるのに対し、大部分の通常の成人が利用できるのは、潜在的な心理構造

4) Corder, S. P. (1967) " The significance of learner' s errors. IRAL 5 : pp.161-170.

5) Corder, S. P. (1981) Error Analysis and Interlanguage . Oxford University Press , pp 10-11.

6) Chomsky(1965) は、言語能力(competence)と言語運用(performance)とを対照的に用いた。すなわち、言語能力とは、用いる言語に関して有している知識で、一方、言語運用は具体的な場面で実際に使用することである。内在化されているこの言語能力については、研究者間で必ずしも一致していない。たとえば、Chomskyは、言語の能力と運用を区別し、前者を研究対象として提案したが、D.Hymes(1971)は、この言語能力を言語使用能力にまで拡大して解釈した。

7) Selinker, L. (1972) 注2)と同様。

Kellerman, E. (1995) Age before beauty : Johnson and Newport revisited. In L. Eubank, and M. Sharwood Smith (eds), The Current state of Interlanguage : Studies in honor William E. Rutherford. Benjamins, p.229.

この5%という数字は、何らかの統計的処理によって導き出された具体的な値ではなく、「非常に少ない数」を意味する一つの比喩として意図されたものである。Kellerman(1995)参照。

8) Lenneberg, E. H. (1967) Biological Foundations of Language John Wiley and Sons. p. 376.

(latent psychological structure)の中に存在するメカニズムによるものであり、インターランゲージの存在を仮定させる根拠となっている。

三. インターランゲージ 研究の発展

Selinker(1972)⁹⁾は、インターランゲージの取り扱うべき問題点についてかなり包括的な整理を試みている。彼はインターランゲージ研究の中心的概念となり、第二言語習得に一般的に見られる現象である化石化現象(fossilization)について述べている。学習者のインターランゲージは第二言語に向けて全体的に発達して行くがその中において、ある項目や規則が不完全なままで発達を止め、そのままの状態維持されることがある。この結果、他の点では流暢に第二言語を使いこなせることのできる学習者が、特定の誤りを絶えず繰り返す状況が生まれてくる。

このように、化石化現象は第二言語学習者のインターランゲージの中に間違った言語形式が、かなり永続的に取り込まれる現象を示す概念として定義づけている。このような誤りは、いかに多く第二言語のデータに触れたとしても、いかに多く説明や教授を受けたとしても改善されることがあまりなく、比較的永続的な誤りとして残る特徴をもっている。

Selinkerがインターランゲージという用語で第二言語学習者の言語を表した当時、ほぼ同じ概念を表す別の呼称が存在していた。Nemser(1971)¹⁰⁾はこれに近似体系(approximative system)という述語を与え、Corder(1967)¹¹⁾これに過渡的能力(transitional competence)という述語を与えた。前者は、第二言語学習者がある一時点において持つ言語は不完全なものであることと、この言語が第二言語の基準を目指して発達していく性質を持っていることを強調している。後者は、不安定で常に変化する過渡的な性格を持っていることを強調している。

このように、類似してはいるが異なった面を強調する概念が当初から存在していることは、Selinkerの提示したインターランゲージの概念がさらに洗練され、変化する可能性を示していたものとして受け止めることができる。まさに、この概念は時代的な背景の中でさまざまな観

潜在的言語構造は、Lenneberg(1967)が第一言語習得において作用すると想定するものである。Lennebergによれば、これは子供の頭脳に先天的に備わっている構造で、普遍的特性として実現される。この考え方は、一般的に言語習得における臨界期仮説(critical period hypothesis)として知られている。言語習得の臨界期は、2歳から思春期までであるとされる。

9) Selinker, L. (1972) 注2)と同様。pp. 209-231.

10) Nemser (1971) Approximative System of Foreign, IRAL, 9, 2, pp.115-123.

11) Corder, S. P. (1967) 注4)と同様。

点から修正され、補足されることになった。このことがインターランゲージ仮説の展開へとつながったのである。その背景にあったのは、当時の第二言語習得研究がもたらした新しい事実の蓄積である。

インターランゲージの重要性について、Corder(1981)¹²⁾ は次のように述べている。

「そこで、必然的に第一言語の獲得過程と第二言語習得の間には、何らかの関連があるのだ、という問題を考えることになった。」

Nemser(1971)はまえにも述べたようにインターランゲージ体系に対して、近似体系(approximative system)という述語を与え、対照分析理論の限界を補うものとして、また一般言語学における研究のために、これを組織的に研究することの重要性を強調した。このように、Corder、Nemserによってインターランゲージの基礎的構造が造り上げられた後を受けて、Selinkerはインターランゲージの実体を言語学的に説明した。

Selinker(1972)¹³⁾は化石化されたインターランゲージの言語学的プロセスが、言いあやまりを産み出すプロセス、もしくはメカニズムであるという説明を試みている。かれはこの言語学的プロセスとして、次の五つのプロセスをあげている。

- (1) 第一言語の転移
- (2) 第二言語における訓練の転移
- (3) 第二言語習得の方略
- (4) 第二言語におけるコミュニケーション
- (5) 目標言語の材料の過剰般化

これはインターランゲージにおける言いあやまりの生ずる言語学的メカニズムを、これまでの対照分析の仮説のように、単に第一言語の規則の転移のみに求めるのではなく、より新しい統合的観点から言いあやまりを分析するものであり、インターランゲージ体系を解明し、新しい道筋を示したということにおいて注目に値する。

今まで述べてきたようにインターランゲージは、Selinker、Corder、Nemserによって、その研究の方向と理論的枠組みが基本的に与えられたといえよう。他方、インターランゲージの概念化と平行した形で、インターランゲージ体系の具体的な研究を通し、対照分析仮説の予測力、説明力の限界を実証しようとする一連の研究も進められた。

Richards(1971a)¹⁴⁾の研究もその一つである。1970年のTESOL(Teaching English Speakers of Other Language)大会で発表されたこの論文は、第二言語としての英語

12) Corder, S. P. (1981) 注5) と同書。p. 6.

13) Selinker, L. (1972) 注2) と同様。p.36.

学習者の誤りを非対照分析的視点から抽出し、その誤りの分析を試みたものであった。すなわち、ESL学習者の誤りのうち、対照分析仮説で説明できる干渉による誤り (interference error) 以外の誤りの性質を明らかにしようとしたのである。

また、Richards(1971b)¹⁵⁾は第二言語話者の言いあやまりを、干渉の誤り、過剰般化、パフォーマンス誤りに分類し、さらにRichards(1971a : 1971b)は、干渉による誤り以外の多くの種類の誤りが、第二言語学習者の言語の中に存在することを明らかにした。具体的には、第一言語内における不完全な規則の習得が原因となる言語内誤り (Intralingual error)、および学習者に与えられる限られたシ資料から設定された不完全な仮説に起因する発達の誤り (Developmental error) が広く存在することをRichardsは明示したのである。

Richardsの研究は干渉による誤りと非干渉による誤りとを分析し、その割合を量的に比較するといったものではない。それは非干渉による誤りの存在と、その性質を明らかにしようとしたものである。さらに、この研究では、これまで看過されてきた非干渉による誤りに、はじめて組織的に光を当て、この分野が研究に値することを実証するものとして、言いあやまり研究において有益なものとなったといえることができる。

一方、Jain(1974)¹⁶⁾も第二言語としての英語話者の誤りを分析する中で、第一言語と無関係な誤りに注目するとともに、その原因を検討した結果、対照分析に基づいた言いあやまり研究が、不完全であることを指摘している。

また、Ravem(1968)¹⁷⁾も、第一言語の干渉という観点からではなく、第一言語習得との共通性という観点から、第二言語習得に関する研究を行い対照分析仮説の枠組みを越えた具体的研究を行っている。

Richards、Jain、Ravemの研究はSelinker、Corder、Nemserに基礎を与えられることによって、言いあやまり研究におけるインターランゲージ研究という、新しい研究分野の確立に貢献したといえることができるだろう。

14) Richards(1971a) Error Analysis and Second Language Strategies, Language Sciences No. 17, Oct. pp.12-22.

15) Richards(1971b) A Non-Contrastive Approach to Error Analysis, ELT, 25, 3, Jun. pp.204-219.

16) Jain, M. P. (1974) Error Analysis, Cause and Significance, Richard, Jacks, (ed). pp. 189-21.

17) Ravem(1968) Language Acquisition in a Second Language Environment, IRAL, 6, 2, May pp. 175-185.

四. インターランゲージ研究の教育的意義

つづいて教育的観点からみたインターランゲージ研究についての言及を試みることにする。初期のインターランゲージ研究において教育に対する我々の態度の改善は一つには、Chomskyのコンピタンス定義における理想化への心理言語学的志向から、もう一つに、第一言語習得が体系的に予測できるものであるという見解から生まれたといえることができる。

しかし、Corder(1981)¹⁸⁾およびFaerch&Kasper(1983)¹⁹⁾らは、インターランゲージの関心がコンピタンスの記述から過程へと移行したことに注目している。インターランゲージを記述する意義は、おもに言語習得と本質について仮説を立てるためのデータとしての学習過程に光を当てることにある。それぞれインターランゲージ行動につながる基底のメカニズムに関する研究は心理言語学において重要ではあるが、このような研究の結果をシラバスや教授法に取り組みることによって、その関係を更新するまえに一般化の可能性について十分に検討することも必要となってくる。

言語形式の出現の機能的説明をもたず、ただその出現に関する年代順の説明しか与えないインターランゲージの研究は、教授法にとって何の役にも立たない。なぜなら、このような説明は習得を誘発するために工夫される必要のある条件、つまり概念の発達に関係する条件とか、談話研究、たとえばHatch(1978)²⁰⁾で述べられているような、コミュニケーションの相互作用の文脈に関連した条件に、何ら指針を与えないからである。

しかしながら、このような指針はある種の形式的出現を規定することに関する説明を越えて提示される必要がある。また我々は、規則一般がどのように学習者の心の中で推論（把握）されるのか、また言語学習においてその規則がどのような役割を果たすのか、つまり規則形式の認識論的全課程が実際、どのように作用しているのかについて、インターランゲージ研究が何らかの指針を与えることを要求する。このことを満たすには、かなり異なったインターランゲージ発達のための条件、つまり、その発達が起きるコミュニケーションの文脈を扱わなければならない条件への考察を必要とする。

インターランゲージ研究の目的は、言語学習者の中間的な体系を定義する規則と、その規則がどのように内在化されるかを詳述することである。また、最近の研究ではとくにこの規則の可変性と、コミュニケーション文脈でこれらが制限され、使われる様子を示すことが主流となっている。その仮定は言語学習は煎じつめれば規則の問題にかかわるものであり、言語

18) Corder, S. P. (1981) 注5) と同書。

19) Faerch, C. and Kasper, G. & Kasper(1983) *Strategies in Interlanguage Communication*. London: Longman.

20) Hatch, E. M. (ed.) (1978) *Second Language Acquisition: a book of readings*. Rowley, MA: Newbury House.

学習者は自由に使える言語データから生成的な体系を引き出すことに、すべての注意を傾けることを示している。

ところで、このことは実際の問題として言語学習に当てはめることができるといえるのであろうか。規則を同定することは、インターランゲージ研究の中心的関心事であると容易に認められるところであるが、それが唯一のものであるとは考え難い。また、言語間のレパートリー中の規則に一致しない項目については、どうであろうか。いくつかの項目は、後の段階で組織化されるかもしれないが、もしそうであるとするれば、どのような理由により当初において規則に一致することのない項目として現われることがないのであろうか。これらの項目の中において、いくつかは規則への一致を拒み、「化石化した」形式として留まることになるかもしれない。

なぜ、他の形式ではなく、これらの形式がとりあげられるのであろうか。また、このような抵抗の理由は何であろうか。これらの疑問は、規則形成過程それ自体の本質と、言語学習一般におけるその役割の解明によって明らかにされなければならないだろう。

さらに、もしインターランゲージ研究が学習の結果から生まれる言語についての単なる情報ではなく、学習についての教育的洞察を与えるのであれば、このような疑問はその研究の中核となるべきであらう。したがって、可変性、組織化の遅れ、あるいはその化石化による停止などといった現象を書き留めるだけでは十分であるとはいえずにない。

つまり、その現象は言語学習と言語運用についての統合理論のための、理論的根拠として捉えられる必要があるということになる。Coderの研究はつねに、この種の思索によって特徴づけられるのであるが、このことこそ、かれの研究が非常に意義のある由縁でもある。

Brumfit(1984)²¹⁾は、教育は何らかの形で個人に介入することであるとする考えに立脚して、インターランゲージ研究がどのように教授法やシラバス編成に関わりをもち得るかを検討している。かれは、インターランゲージ研究が教授における誤りへの対応に関する積極的態度を教師に与え、言語習得の解明に光を当てていることについて認めながらも、その成果が教授法の開発やシラバスの作成に応用できるほどまでに、一般性をもつものではないとして指摘している。

また、Krashenら(1983)²²⁾のナチュラル・アプローチ(Natural approach)に批判を加え、言語記述と言語教授との複雑な関係を把握し得ない現段階のインターランゲージ研究は実際の教授理論構築に何も寄与するものではない、とする見解を示している。

インターランゲージを記述する意義は、おもに言語習得の本質について仮説を立てるためのデータとしての学習過程に光を当てることにある。問題はこのことが直ちに我々を複雑で思

21) Brumfit, C. J. (1984) Communication Methodology in language Teaching.

22) Krashen, S. D. and Terrell, T. D. (1983) The Natural Approach.

藤森和子訳『ナチュラル・アプローチのすすめ』(1986), 71頁-76頁。

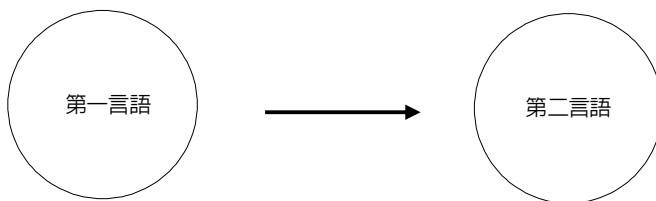
索的な領域に導き、その結果、教授方法への示唆を引き出すのが困難になる危険性も伴うということである。

Selinker(1972)²³⁾によれば、化石化する言語現象は学習者の年齢や第二言語で受けた説明と指導に関係なく、ある特定の第一言語話者がかれらのインターランゲージにおいて保持されやすい、ある特定の第二言語に関連する言語項目、規則、下位体系であるとされる。

ここでは、まずインターランゲージの概念を導入し、日本でこれまで採用されてきた第二言語教育法と、その学習者の言語構造の図式化を試みる。これはCorder(1981)²⁴⁾のインターランゲージの図をもとにして図式化したものである。

矢印は媒介言語（教えるときに使う言語）の方法を示す。

図Aは、第二言語教育において伝統的に採用されている「文法訳読法」を説明したものである。この教授法では第一言語を使って第二言語の文法規則および統辞構造の規則について説明するので学習者は、両言語をまったく対立的（相対的）にとらえている。学習者にとって第二言語は異質であるがゆえに、両言語が心理的に接近したり、共鳴する確立は極めて低い。



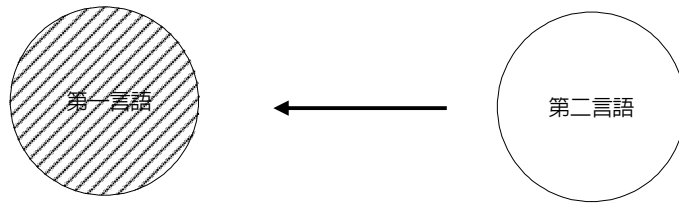
図A

このような言語学習構造を背景にした学習者の心理状態は、つねに第一言語を通じて学習が行われるため、防御の姿勢をとる必要がない反面、新しい言語に対する音声的刺激が少ない。このため、第一言語内に第二言語を摂取した実感が乏しいなど、といった不満が学習者に残る。

図Bは戦後、おもに中等教育レベルで採用された教授法、ダイレクト・メソッド・オーラル・アプローチ、オーラル・メソッドなどを説明したものである。第一言語部分に斜線が引かれているのは、第二言語学習の際に第一言語使用を禁止、または抑制することを意味する。このため両言語が共鳴する現象は起らない。第二言語を理解する媒介は原則として第二言語により、場合によっては絵やジェスチャーが使用される。

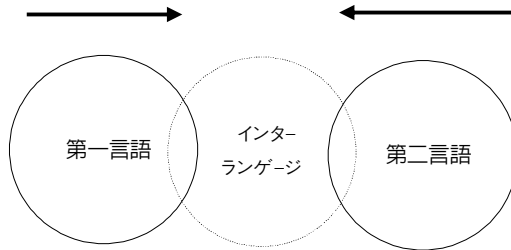
23) Selinker, L. (1972) 注2) と同様。p.36.

24) Corder, S. P. (1981) 注5) と同書。p. 17.

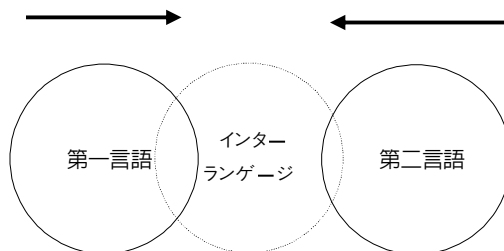


図B

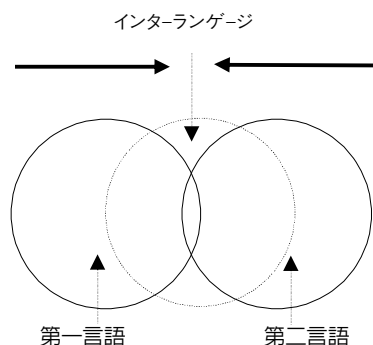
このように学習者は第一言語使用の抑制を強いられるために内容理解に困難を感じるとともに、心理面では学習活動に精神的不安を感じて第二言語に対して挑戦的態度をとったりすることになる。また、極度の緊張のため、疲労が重なり一時的に学習を丹念することもある。



図C-1



図C-2



図C-3

図Cは、新しくインターランゲージの概念を導入し、第一言語とインターランゲージと第二言語の三者の一体化をめざしたものである。図A、図Bでは相互に分離した第一言語と第二言語を、図Cでは、インターランゲージが両言語の間に位置することにより、互いの連結がなされている。したがって、インターランゲージには第一言語と第二言語に、それぞれ共有する部分とそうでない部分とが認められる。第一言語と第二言語はインターランゲージの介入により相互に接近する行動がみられる。(矢印の方向)。

この言語概念の下に学習活動が積極的に進められた場合、第一言語および第二言語は多様な言語刺激を受け、それぞれの言語能力は高められることになる。同じく、インターランゲージも双方の言語刺激を受けて言語量は増大し、そのため、言語能力も高まる。図Cのインターランゲージをとり囲む点線は、言語力の変動性を意味する。

すなわち、学習者におけるこの言語構造に最善と思われる学習方法が採用されなければ点線の円は急速に縮小するのである。学習心理面に関しては、第二言語に対する緊張感や恐怖感を緩和する役割をインターランゲージが果たしているので、学習言語に対する心理的反発や逃避は起らない。このような学習構造をもつ教授過程においては学習者が活動の中心となるべきであるが、韓国における日本語教育では、いまだに明確な論理基盤をもった教授法は確立されていない。

学習過程は学習者が第一言語と第二言語双方の言語刺激を受けながら、インターランゲージを生成する一連の流れを意味する。これはスピーキングとヒアリングの能力を高めることに有益な示唆を与える概念でもある。スピーキングとヒアリングが中心となる教授法については、欧米においてもこれまでの理論および実践研究があまり行われてない分野であったが、話しことばの機能の重要性を考えると、この方面の教授法の研究が積極的に進められる必要があると考えられる。

以上のように、教授法の説明を加えながら学習者における言語構造として、三構造につ

いて取り上げて図解を試みた。とくに、三つ目の図Cについては、第一言語と第二言語間にインターランゲージを媒介することによって、学習者自身の自己表現力を志向したものである。これによって生成されたインターランゲージは、それぞれ異なった構造を有するものと推測され得るものである。

それぞれインターランゲージ行動につながる基底の発話メカニズムに関する研究は第二言語習得において重要ではあるが、このような研究の結果をシラバスや教授法に組み込むことによって、その関係を更新するまえに一般化の可能性について十分に検討することも必要となってくる。

五. おわりに

これまで、第二言語習得におけるインターランゲージに関する理論的考察を行ってきた。いままでの第二言語習得における日本語教育の中でのインターランゲージ研究は発話メカニズムを解明する理論的方向よりも個別的なインターランゲージ分析データを蓄積し、おもに誤り分析と言語教育との関係を強化するなどの実践的方向を重視した研究が多い。

しかし、本論文では第二言語習得における普遍性を求めてインターランゲージの設定に関する研究と先行研究について概観し、インターランゲージ研究の教育的意義について述べてきた。すなわち、第二言語習得の観点に立つことによりインターランゲージ研究の問題を幅広く捉え、言語の本質のメカニズムを解明するための一つの手がかりを得る方向を志向して考察してきたのである。

本研究の最終目標は、発話メカニズムを解明することを目指していくことである。第二言語習得理論の問題は多領域・広範囲にまたがるものであるが、本研究ではその一部を扱ってきたにすぎない。これらについては今後の課題にしたい。

【参考文献】

- ・小柳かおる(2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク、54頁-57頁。
- ・迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク、157頁-179頁。
- ・島岡丘(1994)『中間言語の音声学』小学館プロダクション。

- ・ JACET SLA研究会編著 (2005) 『文献からみる第二言語習得研究』 開拓社. 3頁-26頁
- ・ Brumfit , C. J. (1984) Communication Methodology in language Teaching.
- ・ Coder,S.P.(1967)The significance of learner's errors .IRAL5 pp.161-170
- ・ Coder, S. P.(1981) Error Analysis and Interlanguage, Oxford University Press
- ・ Faerch, c. and Kasper, G (1983) Strategies in Interlanguage Communication. London : Longman
- ・ Hatch, E. M. (ed.) (1978) Second Language Acousition : a book of readings. Rowley, MA : Newbury House.
- ・ Jain, M. P. (1974) Error Analysis , Cause and Significance , Richard , Jacks. (ed). pp. 189-21.
- ・ Krashen , S. D. and Terrell , T. D. (1983) The Natual Approach.
藤森和子訳 『ナチュラル. アプローチのすすめ』 (1986), 71頁-76頁。
- ・ Kellerman, E. (1995) Age before beauty : Johnson and Newport revisited. In L. Eubank, and M. Sharwood Smith (eds), The Current state of Interlanguage : Studies in honor William E. Rutherford. Benjamins , p.229.
- ・ Lenneberg, E. H. (1967) Biological Foundations of Language John Wiley and Sons. p. 376.
- ・ Nemser (1971) Approximative System of Foreign Language , IRAL 9,2 pp.115-123
- ・ Ravem(1968) Language Acquisition in a Second Language Environment ,IRAL , 6, 2, May pp. 175-185.
- ・ Richards(1971a) Error Analysis and Second Language Strategies , Language Sciences No. 17, Oct. ,pp.12-22.
- ・ Richards(1971b) A Non-Contrastive Approach to Error Analysis , ELT, 25., 3 , Jun, pp.204-219.
- ・ Selinker, L. (1972) Interlanguage, IRAL(Internation Review of Applied Linguistics in Language Teaching 10 : pp.209-231
- ・ Selinker, L. (1974) Interlanguage, New Frontiere in second Language learning, Schuman, J. H. and Seteson, N. p.117

要 旨

最近の第二言語習得研究動向では、第二言語体系とも違うインターランゲージ（中間言語）体系の存在を確認し、その特質を明らかにしようとする研究がなされつつある。これらの一連の研究から第一言語の干渉とは異なったインターランゲージが、音声レベルでも存在することが証明されることとなった。このような言語学研究の流れの中で、従来の日本語教育においては第二言語習得理論の研究があまり重視されてこなかったのが、現実であろう。とくに、韓国における日本語教育ではほとんどなされていないのが現在の状況である。

しかし、最近では日本語教育の中での第二言語習得理論の研究がすこしずつなされつつあるものの、日本語教育での第二言語習得研究は、おもに実践的な研究が主流をなしており、理論的な研究があまりなされていないのが実情である。とくに、第二言語習得における日本語教育の中でのインターランゲージ研究は発話メカニズムを解明する理論的方向よりも、個別的なインターランゲージ分析データを蓄積し、おもに誤り分析と言語教育との関係を強化するなどの実践的方向を重視した研究が多い。

本研究では、第二言語習得理論の中でとくに最近、注目を浴びているインターランゲージの理論的な研究について考察した。それは、第二言語習得における普遍性を求めてインターランゲージの設定に関する研究と先行研究について概観し、インターランゲージ研究の教育的意義について述べてきた。すなわち、第二言語習得の観点に立つことによりインターランゲージ研究の問題を幅広く捉え、言語の本質のメカニズムを解明するための手がかりを得る方向を志向して考察してきたのである。本研究の最終目標は、発話メカニズムを解明することを目指していくことである。第二言語習得理論の問題は多領域、広範囲にまたがるものであるが、本研究ではその一部を扱ってきたにすぎない。これらについては今後の課題にしたい。

キーワード：インターランゲージ体系、第二言語習得理論、過渡的能力、化石化現象、コンピタンス誤り、パフォーマンス誤り、第二言語教育、教授法

투 고 : 2007. 5. 31
1차 심사 : 2007. 6. 9
2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (305-0836) 日本国 茨城県 つくば市 山中480-39
電 話 : 029-853-6743
e-mail : kjyoo@smu.ac.kr

www.kci.go.kr